



OVERSEAS

Islamic Republic of Pakistan

—パキスタン・イスラム共和国—

海外事情



パキスタンの風習・文化にふれて



池田 博 IKEDA Hiroshi
鈴木 尋子 SUZUKI Hiroko
豊田 雄介 TOYODA Yusuke
三井共同建設コンサルタント株式会社 / 海外事業部

はじめに

2012年9月から発電事業に係る準備調査のため、パキスタンを経由して4回訪問した。

パキスタンへは、成田からバンコク経由で約11時間のフライトである。初めて訪れる国であり、治安の悪さも事前に聞いていたため、どちらかといえば不安な気持ちの方が強かった。

しかし、訪れてみれば熱心なイスラ

ム教国であり、生真面目な国民性に感銘を覚えることも多かった。宗教、文化、歴史、すべてが日本と異なるパキスタンを紹介する。

パキスタンの概要

パキスタンは日本の約2倍の面積を有しており、2012年現在で人口1億8千万人、人口増加率年2%の経済発展が期待される国の一つである。

東はインド、北東は中国、北西はアフガニスタン、西はイランと国境を接し、南はアラビア海に面している。

首都は北部にあるイスラマバード市で、街路樹が多い落ち着いた街並みである。南部にある最大の商業都市カラチ市が主に滞在した町であり、バスや乗用車が忙しく走り、コンクリートむき出しのビルが乱立する都会であった。

気候

カラチ市がある南部シンド州は砂漠気候に属するが、雨季（モンスーン期）もあり、5～6月が最も高温となる。カラチ市から北東へ150km程にあるハイデラバード市近郊のイン



図1 パキスタン位置図



写真1 ジャムショロ県の荒野



写真2 タールパーカー県の住居



写真3 牛の放牧（タールパーカー県）

ダス川流域で調査した時は42℃の酷暑で、木陰に入って暑さを凌ぐしかなく、こんなにも木のありがたみを感じたことはこれまでなかった。

乾季が過ぎるとモンスーン期になり、インダス川流域やパンジャブ州では洪水が頻発するようになる。とは言っても、ハイデラバード市の年間降水量は200mm程度と東京都の1割強しかない。

熱心なイスラム教国

パキスタンはもともと英領インドの一部であったが、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒との宗教対立により、1947年にパキスタンとして分離独立した経緯があり、イスラム教徒が国民の97%を占める。彼らは当然のごとく、酒、たばこは嗜まず、豚肉も食べない。

女性は外出する際にはブルカ（女性用のベール）で頭を隠すため、ブルカと黒い民族衣装を着て通勤し、室内で普段着に着替える人もいる。

イスラム教国ではお馴染みだが、明け方5時頃になると町中にコーランが鳴り響き、お祈りタイムが始まる。カラチ市から西へ350km程離れた砂漠地帯タールパーカー県に宿泊した朝は、大音量のコーランで目が覚めた。また、ある発電事業の環境アセスメント公聴会では、事業者

とNGOが激論を交わしている最中に、コーランと共にお祈りタイムが始まった。すると、進行役がコーランに注意を促し、一瞬で会場は静かなお祈りに入った。そしてお祈りが終わると再び熱い議論に戻ったのだった。

食事文化

パキスタンでは宗教上、豚肉を食さない。宿泊したホテルの日本食レストランにある「カツ丼」は、牛肉のカツだった。そのため、帰国後のトンカツが楽しみの一つになる。一般的な食事はインドと似ており、カレー、パン（チャパティ、ロティ）、ケバブ（串焼き）、ビリヤニ（肉入り炊き込みご飯）などで、暑い国故か油っぽいものが多い。ときどき現地の秘書が買って来てくれるビリヤニが美味しかった。

一方、ラマダン（断食）の習慣があ

る影響からか、普段から昼食を食べないか、スナック等の軽食で済ます人も多く、ランチタイムを重視する日本人とは異なる。それもあるが、現地の協力業者と調査に行くときは、カロリーメイトやパンなどを忍ばせて、車中でこっそり食べて空腹を凌ぐのが常であった。そんな彼らも夕食になると子供のように結構な量を食べていたのには親近感を覚えた。

治安

パキスタンは、タリバンによるカラチ空港襲撃事件（2014年6月10日）に見られるように、テロや誘拐、銃絡みの事件が頻発しており、治安が良いとは言いがたい。そのため、カラチ市では買い物に行く時でさえも、四駆車に警備員を同乗させて移動した。郊外に出るときは、地元警察車両に先導され迅速に移動した。逆に、目立つのではないかと懸念も



写真4 ビリヤニ（手前）とケバブ



写真5 ラクダの行列（タールパーカー県）

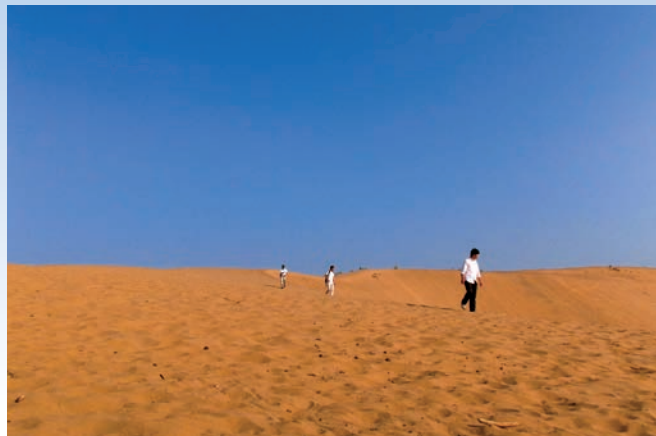


写真6 一面に広がる砂



写真7 インダス川

あったが…。当然、自由に外をジョギングすることもできず、週末はホテルでテニスや卓球、水泳をしたり、ジムに行って気分転換を図った。

平和なタールパーカー県

タールパーカー県は最貧地域ではあるものの、国内で最も平和な地域と言われている。自然と人間が共存するのどかな砂漠地帯で、一面が砂と草地、低木であり、夕日が美しい。

この地域では、ラクダやロバを運搬や生計手段として使いながら、ヤギや牛の放牧を行う住民を多数みかけた。こうした家畜は地元住民にとって高価な資産であり、ラクダの行列を導く男性を、「億万長者だ!」と呼んでいるのを聞いた。

また、この地域は地下水の塩分濃度が高く、良質な飲料水の確保が難しいことや干ばつの影響を受けやすいといった問題があり、多数の子供たちが栄養失調で命を落としていることが報道されていた。

モンスーン期には地下水位が上昇し、塩害が発生する。そこで、政府は1990年代に人工の排水路を建設し、農地の地下水をポンプで汲み上げて、この塩水排水専用排水路に放出している。

ビジネス環境

パキスタンでは小学校から英語の授業があり、多くの人が英語を流暢に話し、ビジネスはしやすい国である。ただし、ラマダンの時期は日中に断食し、夕方には集中力が落ちるため、午前にやりとりすることと、イード（ラマダン明けや巡礼後の連休）の休暇時期を考慮して仕事を進めることが注意点である。

人気スポーツ

ダントツに人気が高いのはクリケットであり、子供たちが道端で遊んでいるのをよく見かけた。また、ブルカをした女性が重量挙げをしている写真が新聞に掲載されていて驚いた。

インダス川

インダス川はインドからカシミール地方に入り、パキスタンを縦断するように南へ流れてアラビア海に出る。川には数十kmおきに堰が設置されており、そこから左右に取水して血管のように農業用水路が延びる。農作物はさとうきび、小麦、コメ等であり、インダス川なくして、インダス文明は発展し得なかった。

自然保護

パキスタンでは国際自然保護連



写真8 重量挙げ (KARACHI TRIBUNE 誌)

合 (IUCN) や世界自然保護基金 (WWF) といったNGOが活発に活動しており、IUCNレッドデータブックに登録されている貴重種の保護活動を行っている。

WWFはインダス川に住むインダスイルカの保護に取り組んでいる。モンスーン期になるとインダスイルカが用水路に入り込み、乾季に水位が下がって逃げ場を失い犠牲になるケースが相次いだ。そこで、用水路に入ったインダスイルカを捕獲して本流に戻し、成果を上げている。また、カラチ市西南部のアラビア海岸に湿地保護センターを設け、マングローブの保護をしている。

シンド州野生動物課はアラビア海岸沿いにウミガメの孵化施設を設け、野良犬などから卵を保護している。

Made in Japan への信頼

パキスタンでは派手に装飾されたデコレーショントラックを多く見



写真9 WWFの湿地保護センター



写真10 ウミガメ孵化施設

かける。日本と同じく左側通行であり、多くの日本製中古車がそのまま走っている。数十年前の日本製中古車が現役で活躍しているのは嬉しい。「○○自動車教習所」と書かれたままの中型バスや、車庫証明のシールが貼ったままの乗用車があるのは面白い。

また、ハイデラバード北部のジャムショロ県にある火力発電所には中国製と日本製のガス・重油タービンが並列で設置されている。稼働から約25年を経た現在、正常に動いているのは日本製タービンのみだった。現地の人々が「日本製が一番だ」と評価してくれていた。

停電の多い国

パキスタンでは、全国平均で1日12時間以上も停電している状況で、電力不足の解消が喫緊の課題である。カラチ市やイスラマバード市などの大都市ではさほど気にならないが、タールパーカー県では夜中に突然停電し、辺り一面真っ暗になる。ハイデラバード市では毎朝2時間の計画停電が行われており、真っ暗闇の中、携帯電話のライトで報告書を仕上げたこともあった。

安定した電力供給は産業発展の



写真11 デコレーショントラック



写真12 パキスタンマンゴー

要であり、政府は発電所増設計画を推し進めている。

パキスタンの人々と社会

プロジェクトを通じて知り合ったパキスタンの人々は、とても賢く品がある。

一方、パキスタンでは教育を受けられる女性はまだまだ少なく、働く女性も少ないものの、国会議員に占める女性の割合は22%で世界ランキング50位と高く、意外な一面に驚かされた。ちなみに、日本は11%で同125位 (2011年世銀調査) だ。

マンゴーの名産地

パキスタンはマンゴーの産地でもある。約8割をパンジャブ州産が占め、残りはシンド州産である。滞在中の5月下旬から6月上旬はマンゴーの収穫期であり、イスラマバード

で現地協力業者がプチ・マンゴーパーティーを開いてくれた。

マンゴーは半分にカットして食べるのが日本では一般的だが、こちらではマンゴーの果肉を手で柔らかくほぐした後、上部のヘタを取って、ぎゅっと握りつぶしながらそこから“飲む”方法が主流だ。贅沢な採れたてマンゴージュースを堪能できた。

平和のため

パキスタンでは治安上や電力不足の問題のほか、様々な政治的課題が混在している。

我々建設コンサルタントが、パキスタンのインフラ整備を通して社会貢献できることも多い。2014年のノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんのように、どんな苦境にも屈せずに、平和で幸せな国づくりの一助になればと思う。